

学生海外調査研究	
G.V.ローシーのヴァラエティ・シアター（ロンドン）における活動に関する史資料収集	
山田 小夜歌	比較社会文化学専攻
期間	2015 年 11 月 2 日～2015 年 11 月 13 日
場所	ロンドン（英国）
施設	ヴィクトリア&アルバート博物館・閲覧室、大英図書館、ウエストミンスター・レファレンス図書館

内容報告

1.調査の必要性・目的

筆者は、日本バレエ草創期に来日した G.V.ローシー[Giovanni Vittorio Rosi, 1867-?]の在日中の舞踊活動に着目して研究を継続している。ローシーは、祖国イタリアにてバレエの教育を受けた後、プロフェッショナルとしてイタリア、そして英国ロンドンのヴァラエティ・シアター¹を中心に、バレエダンサー・振付家として活動した。その後、ローシーは明治末期に開場した帝国劇場の歌劇部の教師として日本に招聘され、舞踊、歌劇・喜歌劇、現代劇作品の上演に関わり、歌劇部の解散後も 1918（大正 7）年にアメリカに渡るまで自ら主宰したローヤル館にて作品の上演を続けた。

このように日本において約 5 年半（1912.8-1918.3）活動したローシーは、先行研究において彼が「日本で初めてバレエを教えた教師」（上野、1992、p.1）として位置づけられているように、日本洋舞黎明期におけるキーパーソンであると認識されていることがわかる。それにも関わらず、ローシーという人物や活動内容について研究が十分に成されているとは言い難い。

筆者は、これまで国内で一次史資料や関連する文献の収集を行い、ローシーの在日中の活動について調査・検討を行ってきた。その結果、ローシーの舞踊・歌劇・演劇に関わる上演活動は、彼が来日前に体得した様々なバレエ経験を基礎として行われていたことが導き出された。彼が日本で上演した 2 作品については、先行研究でもロンドンのヴァラエティ・シアターで実際に上演されていた作品との関連性が指摘されている。在日中のローシーの上演作品に関わる国内の一次資料から得られる情報は乏しく、特に舞踊作品についてはその詳細が不明である。したがって、彼が在日中に上演した作品についてより詳細に検討するためには、彼の来日前の活動、特にロンドンにおける活動について調査・検討することが必要である。

上野房子氏の「日本初のバレエ教師 G.V.ローシー 来日前の歩みを探る」（上野、1992、pp.1-11）は、ローシーおよび妻のジュリア・リーヴェ[Julia Reeve]のロンドン時代の出演作品を抽出し、その内容や評価にも触れた、大変貴重な先行研究である。しかしながら、ローシーとリーヴェに関する記述には他の文献との間に複数の相違点が見られるなど、以前不明な点が多くある。さらに、筆者が昨年度行った学生海外調査研究において収集した一次資料と照らし合わせたところ、史実の信憑性を含めて再度検討する必要性が見出された。

そこで、本調査では、ローシーとリーヴェが来日前の 1902（明治 35）年から 1912（大正元）年まで在籍、または上演活動に関与したとみられる 2 つのヴァラエティ・シアター、すなわちアルハンブラ劇場[Alhambra Theatre]およびエンパイア劇場[Empire Theatre]、さらにヒズ・マジェスティーズ劇場[His Majesty's Theatre]の公演プログラム、舞台写真、関係する新聞・雑誌記事といった史資料の収集と閲覧を目的とした。特に、昨年度予定しながらも先方の都合により訪問が叶わなかったヴィクトリア&アルバート博物館の閲覧室[Blythe House Study Room Victoria&Albert Museum Archives]におけるシアター&パフォーマンス・コレクション[Theatre and Performance Collection]の閲覧を最大の目的とした。

また、彼らが活動していた 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのヴァラエティ・シアターにおけるバレエは、それ以前の欧州を中心としたロマンティック・バレエおよびロシアを中心としたクラシック・バレエと、その後のバレエ・リュス登場というバレエ史上華やかな時代に挟まれ、言及されることは非常に少ない。アイヴァ・ゲストの著書 *Ballet in Leicester Square* (Guest, 1992) やアレクサンデル・カーターの著書 *Dance and dancers in the Victorian and Edwardian music hall ballet* (Carter, 2005) は、上演作品の初演日や当時在籍していた主役級ダンサーなどのクロニクルデータを参照できる有効な先行研究ではあるが、ヴァラエティ・シアターにおけるバレエの実態を読み解くには十分とは言えない。

本調査では、そうしたヴァラエティ・シアターを含めた当時の英国のバレエに関する文献の調査・収集、そして最新の研究動向について探ることも同時に目的とした。

こうして得られた資料を読み解き、分析していくことで、これまで明らかにされてこなかったローシーの日本における上演活動について、より詳細に理解が得られるものと考えられる。

2. 調査の内容・成果

2-1. ヴィクトリア&アルバート博物館・閲覧室におけるアルハンブラ・エンパイア劇場およびヒズ・マジェスティーズ劇場関係資料の閲覧

ヴィクトリア&アルバート博物館の閲覧室は、本館において展示している各部門の収蔵品のうち特に貴重な資料を保存・公開している。閲覧室は本館からは離れたロンドン西部のケンジントン・オリンピック公園[Kensington Olympia]に位置し、事前にナショナル・アート・ライブラリー[National Art Library]に会員登録した上で、訪問日および閲覧希望資料の請求予約を行わなければ訪問することはできない。筆者は、今回シアター&パフォーマンス・コレクションのダンス担当学芸員であるジェーン・プリッチャード氏[Jane Pritchard]と事前に連絡を取り、筆者の研究内容を伝えた上で有益な資料を出納して頂いた。プリッチャード氏は、バレエおよびダンス史専門の研究者で、ロンドンのヴァラエティ・シアターにおけるバレエについても複数の論文を残している。今回は調査期間が短く、また閲覧室が週3日のみの開館ということもあり、多数ある資料の中から、上演作品の内容やローシー夫妻の出演状況の調査に不可欠な1901（明治34）年から1912（明治45）年の公演プログラムを優先して閲覧した。

前述した3つの劇場のプログラムは年代別に整理されており、同月内でも日付違いのプログラムが大量に保存されていた。その数はアルハンブラ劇場のプログラムが65点、エンパイア劇場のプログラムが43点、ヒズ・マジェスティーズ劇場のプログラムが50点、さらにプレイビル（チラシ）等を加えると閲覧が叶った資料は200点を超える。

アルハンブラ劇場はおおよそ夜8時から上演が始まり、打ち出し時間は23時30分から45分前後と推測できる。プログラムは歌や寸劇、管弦楽による演奏などを含め毎回10から12程度の演し物が並び、前半と後半に平均30分から50分前後のバレエ作品が上演されることが多い。1882（明治15）年の火事による焼失・再建される以前のアルハンブラ劇場は、ミュージック・ホールとしての劇場ライセンスのみを保持していたために物語のある作品の上演が禁じられていた。そのため、当初はバレエ・ディヴェルティスマン²の上演がその多くを占めていたが、1884（明治17）年以降は物語のあるバレエを含めた2つのスペクタクル・バレエがプログラムの通例となった。劇場のエントランスには“BALLET & VARIETY'S”と書かれた看板が掲げられ³、プログラムに“National Theatre of Varieties and Home of Ballet.”⁴と記載されていることから、当時バレエ作品の上演がアルハンブラ劇場の興行の中心となっていた様子が窺える。

上演された殆どのバレエ作品は1か月、長ければ1年近くに渡って上演が続けられ、プログラムの前半に旧作、後半に新作が上演されることが多い。旧作は、全篇ではなく、作品の一部分のみを取り上げて再演されることも多々あった。また、作品のキャストは初演時から殆ど変更なく再演が続けられていることが分かる。例えば、1905（明治38）年12月に初演され、1906（明治39）年3月に改訂版が初演された“*Parisiana*”のプログラムからローシーの出演記録を参照すると、初演時から一貫してシーンⅠからⅢ、そしてシーンⅤに登場して同じ役を演じている。

本調査で収集したプログラムに記載されたキャスト表の中からローシーとジュリアの名前を探したところ、既知の作品を除き、新たにアルハンブラ劇場の2作品の上演にローシーが、3作品にジュリアが関わっていたことが判明した。これによって、ローシーはアルハンブラ劇場在籍中に上演されたほぼ全てのバレエ作品に主要キャストとして出演していたことが明らかとなった。また、アルハンブラ劇場は夜の公演のみならずマチネ（昼公演）も行っており⁵、そのプログラムからもローシーの出演が確認された⁶。アルハンブラ劇場の興行が一年を通してほぼ連日行われていたことを鑑みると、ローシーはアルハンブラ在籍中の約8年間に相当数の舞台に出演していたと考えられよう。

また、アルハンブラ劇場は一般向けの公演の他にチャリティー公演を行っていたことも新たに分かった。1904（明治37）年12月8日付のプログラムの表紙には“*For Saint Bartholomew's Hospital*”と記されている。歌を含めた小作品の他に、定期公演においてローシーも主要キャストとして出演していたバレエ“*The Entente Cordiale*”も上演されている⁷。具体的な開演時間は記されていないが、“Morning Performance”となっていることから午前中に上演されたものと推測できる。“*Saint Bartholomew's Hospital*”は、イングランド王ヘンリー一世の側近によって1123（保安4）年に建てられた欧州最古の病院である。こうした歴史ある公共施設に向けてチャリティー公演を行っていたことを示す資料は、当時のアルハンブラ劇場の社会的な位置づけを検討する上で重要となるであろう。

収集したプログラムの中には作品内容が詳細に記載されているものが数点あった。滞在中に全て読み込むことは出来なかったが、全てデジタルカメラで撮影して情報を持ち帰ることが出来たため、今後新聞・雑誌記事の情報とあわせて分析を行いたい。

アルハンブラ劇場に関する資料として、プログラム以外にアルフレッド・モウル・コレクション [Alfred Moul Collection] の一部を閲覧することが出来た。同コレクション名にあるアルフレッド・モウルは、二度に渡ってアルハンブラ劇場の総支配人 [General Manager] を務めた人物である。モウルは、ローシーが同劇場に在籍していた 20 世紀初頭において、総支配人または会長 [Chairman] として運営に関わっており、コレクションには当該期間の劇場に関する資料が数多く含まれている。

今回閲覧したコレクション資料のほとんどは、モウルと衣裳製作会社やエージェント等との往復文書であるが、1903（明治 36）年に初演され、ローシーの妻リーヴェが出演した “*Carmen*” の楽譜なども含まれていた。エージェント会社からの文書の内容の多くは欧州で活躍中のダンサーの情報である。今回確認できただけでも、エージェント会社は Braff、Ercle、Bliss、Barclay、Marinelli の 5 社にのぼった。いずれの会社もロンドン以外にも支局を展開し、それはパリやベルリンといった欧州に加えてニューヨークにも及んでいる。後述する図書館にて閲覧した新聞・雑誌記事からは、アルハンブラやエンパイアをはじめとするロンドンの劇場において公演の看板となった女性ダンサーが、それ以前またはその後フランスやドイツ、イタリア等の劇場にも出演していた様子が読み取れた。こうした当時のダンサーの出演状況の背景には、エージェント会社の働きが大きく関与していたと推測できる。

往復文書は所蔵数が膨大であったため、滞在中に全ての資料に目を通すことは出来なかったが、全てデジタルカメラで撮影し、データを持ち帰ることが出来た。そのデータ数は 1500 を超えており、今後じっくりと読み込み分析を行いたい。特に、前述した Marinelli というエージェント会社は、帝国劇場専務の山本久三郎がローシーの同劇場への招聘に至った要因に挙げた「マリイ・ネリイというエイジェンシー」と、その名前が一致する⁸。ローシーの来日の経緯については諸説あり未だ解明には至っていないため、今回収集した資料を含めて検討を行いたい。

ヒズ・マジェスティーズ劇場は、アルハンブラやエンパイアといったヴァラエティ・シアターとは性格が異なり、当時の新聞や雑誌に掲載された広告では、前者を “Variety Theatre” と記す一方で後者は “Theatre” と記すなど、完全に区別している。同劇場は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、当時人気を博していた俳優ビアボム・トゥリー [Herbert Beerbohm Tree] が劇場を主宰し、シェイクスピア劇を主なレパートリーとしていた。今回閲覧したプログラムからは、既知の 3 作品についてローシーがダンスシーンの振付を担当したことが改めて確認できた。また、ローシーが劇場に関わる以前の上演プログラムを参照したところ、彼と同じくアルハンブラやエンパイアにおいてダンサー、あるいは振付家として活動していた人物が度々ダンスシーンの振付を担当していることが明らかとなった。例えば、1911（明治 44）年に上演された “*A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM*” では、エンパイアで 19 年間ダンサーを努めた後にアルハンブラに移籍したエリーゼ・クラーク [Elise Clerc] が振付に関わっている⁹。こうした資料から、当時 “Variety Theatre” と “Theatre” は区別されながらも、双方の劇場には製作面において関わりがあったことがわかる。

今回の調査では、資料の閲覧に加えて、学芸員のプリッチャード氏より、貴重なローシーおよびリーヴェに関する情報と 19 世紀末から 20 世紀における欧州のバレエ事情、さらには当該分野における現在の研究動向まで、直接お話を伺うことができた。そこで得られた情報は、今後筆者が収集した資料を分析・検討する上で大いに貢献するだろう。今回閲覧したエンパイア劇場のプログラムおよびその他の資料からは、ローシー、リーヴェに関する新たな情報は確認出来なかった。昨年度の海外調査によって得られた情報と併せても、彼らのエンパイアにおける活動期間には、未だ彼らの動向が確認できない空白の期間が存在する。彼らがエンパイア、あるいはロンドンにおいて活動していなかった可能性もある。今後、新聞・雑誌記事を読み込むことで情報収集に努めたい。また、プリッチャード氏よりロンドン市内のサドラーズウェルズ劇場 [Sadler's Wells Theatre] がエンパイア劇場関係の資料を所蔵しているとの情報をご提供頂いた。こちらについても情報の収集を図り、現地調査の必要性を含めて検討を行う。

2-2. 大英図書館およびウエストミンスター・レファレンス図書館における新聞・雑誌記事の収集と閲覧

上記の施設において一部のプログラムおよび貴重な関係資料の閲覧が叶ったが、当時の新聞や雑誌記事も上演作品やローシー夫妻を含めたダンサーに対する評価、また劇場の社会的な位置づけを考察するうえで大変重要な一次資料となる。

ローシーが活動していた当時、ロンドンでは *The Era*、*The Stage*、*The Penny illustrated Paper*、

The Sketch、*The Illustrated Sporting and Dramatic News*、*Ally Sloper's Half Holiday* など、演劇やオペラ公演、パントマイム、ミュージック・ホールやヴァラエティ・シアターに関する記事を度々掲載していた新聞・雑誌が多く刊行されていた。昨年度は、当時の二大英国エンターテインメント専門新聞であった *The Era* (Weekly) と *The Stage* (Weekly) の調査を行った。本年度は、ウエストミンスター・レファレンス図書館[Westminster Reference Library]において、上記の 2 紙の不足部分を補うとともに、大英図書館[the British Library]において、新たに *The Penny illustrated Paper*、*The Sketch* の 2 紙について調査を行うこととした。なお、いずれも年代は 1901（明治 34）年から 1912（明治 45）年に限定した。

The Penny illustrated Paper は、その紙名が示す通りヴィジュアル情報を多く含んだ新聞である。アルハンブラ劇場やエンパイア劇場のバレエ作品についても、*The Era* や *The Stage* のように文字による批評文が掲載されるというよりは、ダンサーや舞台画面のスケッチが掲載されることが多い。アルハンブラ劇場のバレエ作品については、その舞台衣裳のスケッチが度々掲載されていた¹⁰。一般の関心が女性ダンサーに集中する傾向がある中、同紙におけるこういった視点は興味深い。

The Sketch もまたヴィジュアル情報を多く含んだ新聞であるが、*The Penny illustrated Paper* に比べると写真の掲載ページがより豊富にある。アルハンブラ劇場やエンパイア劇場についても、舞台写真が数多く掲載されており、作品の詳細を読み解くのに大きく貢献した。ダンサーのプロマイド写真も度々掲載されているが、取り上げられるのはほぼ全員が女性ダンサーである。それらは、先行研究において指摘されるような「バレリーナが優位を占めるバレエ界」（上野、1992、p.10）の実態を裏付ける資料であろう。

ローシーはアルハンブラ劇場の看板として活躍したジュリア・シール[Julia Seal]やレオノーラ[Leonora]を初めとする多くの女性ダンサーの相手役を務めている。また、アン・ダンクレイ[Anne Dancrey]がフランスから客演した際も相手役を務め、4 枚の写真とともに *The Sketch* (1905 年 9 月 20 日号) の紙面に登場している。さらに、エンパイア劇場ではマリンスキー劇場出身で後にバレエ・リュスにも参加したりディア・キャシュト[Lydia Kyasht]との共演も果たしている。

このように、ローシーは両劇場で度々重要な役割を担った。また先述したように、彼はアルハンブラ劇場においてほぼすべてのバレエ作品において主要な役割を与えられ、公演に継続して出演した。こうしたローシーの活動状況から、彼はスター・ダンサーとして世間から注目されることはなかったにせよ、制作側からはある程度の信頼を得ていたといえるのではなかろうか。

本調査では、*The Penny illustrated Paper*、*The Sketch* の 2 紙について、可能な限り該当する年代全ての紙面に目を通すように努めたが、大英図書館における機材トラブルも重なり、残念ながら *The Sketch* の一部分の閲覧が叶わなかった。閲覧した紙面については、必要箇所を複写またはデジタルカメラにて撮影を行った。こちらのデータ総数も 1000 を超えるため、今後じっくりと読み込み分析を行っていく。

2-3. 劇場跡地への訪問

ローシーが実際に出演していたアルハンブラ、エンパイア、ヒズ・マジェスティーズ劇場に加えて、同時期にアンナ・パヴロワ[Anna Pavlovna]をはじめとするロシアのバレエグループが公演を行ったパレス劇場[Palace Theatre]、ドゥーリーレーン劇場[Theatre Royal Drury Lane]、ヒポドローム劇場[The Hippodrome]、ライシャム劇場[Lyceum Theatre]の跡地を訪問した。アルハンブラ劇場とエンパイア劇場は、ロンドンの劇場が集まるウエストエンド地区のレスター・スクエアに位置する。両劇場ともに現在は映画館になっており、残念ながら舞台を確認することはできない。それでも、アルハンブラ劇場（現在はオデオン[Odeon]の名称に変わっている）の裏口付近に残された石碑には、かつてロンドンにおけるバレエ上演の中心であったと刻まれており、同劇場の評価の一側面を窺い知ることが出来た。

3. 今後の研究へ

以上のように、本調査は移動日および施設の休館日を除いて実質 9 日間と短期間であったが、収穫の多い調査となった。

膨大な量のプログラムの閲覧が叶ったことにより、ローシーとジュリアがロンドンにおいて関わった作品が新たに判明したことは、現在筆者が行っているローシーおよびジュリアの活動年表の作成に大いに貢献する。また、ローシーがとりわけアルハンブラ劇場において、バレエ作品にダンサーとして継続的に関わったことが明確になったことは、ローシーの人物像および彼の生涯に渡る舞踊活動の特徴に迫っていく上で、非常に貴重な知見となる。今後は、今回得られた資料を詳細に読み込み、分析することで、彼の在日中の活動の視座を探っていく。

また、本調査によって、彼らが活動していた 19 世紀末から 20 世紀初頭における欧州のバレエに関する文献や学術研究は少なく、未だ解明されていない点が多く存在していることが改めて確認された。ローシーの在日中の活動の真相に迫るためには、彼のロンドン時代の活動のクロニクルなデータを追うだけではなく、その周辺環境や特徴を捉えることが不可欠となる。今後、今回閲覧が果たせなかったヴィクトリア&アルバート博物館・閲覧室の他の収蔵資料の閲覧も含めて調査を継続し、彼のロンドン時代の活動についてもさらに探求したい。

筆者の研究は、日本バレエ黎明期においてローシーによってもたらされたバレエの特徴を、イタリアやイギリスといった世界のバレエ状況と関連付けながら捉えようとするものである。それは、バレエという一種の芸術を通してグローバル化の一側面を検討することに繋がる。その意味でも、本調査が国際的な女性リーダーの育成に関わるプログラムの一環として、目的を果たせたものと考えている。

本調査で得られた知見は、筆者の博士論文のおそらく第一章と第二章に関わるであろう。また、本調査の成果の一部は来年度舞踊学会刊行誌『舞踊学』へ原著論文としての投稿を予定している。

注

- ¹ 「ミュージック・ホール」と称されることも多いが、英国においてミュージック・ホール全盛期となった 19 世紀末から 20 世紀初頭には、歌や踊りに加えて、手品や曲芸など演し物の種類が増え、所謂「ヴァリエティ」を観せる「ヴァリエティ・シアター」の呼称が一般化する。
- ² ディヴェルティスマン[Divertissement]は、もとは 18 世紀の舞台演劇における幕間の余興や、芝居のあらすじを結びつける歌や踊りのことを指したが、19 世紀後半のバレエでしばしば用いられる、物語の進行とは直接関係しない一連の踊りや、様々なソロ、デュエット、小グループによる踊りのコンサート等にもその呼称が用いられることもある。
- ³ *Alhambra Theatre Program*、1905 年 12 月 11 日付に掲載された劇場のスケッチより。
- ⁴ *Alhambra Theatre Program*、1905 年 6 月 26 日付。
- ⁵ マチネーは午後 3 時開演の場合が多かった。（*Alhambra Theatre Program*、1905 年 1 月 2 日付）
- ⁶ *Alhambra Theatre Program GRAND MATINEE*、1906 年 3 月 29 日付。
- ⁷ 出演者の記載がないため、このチャリティー公演にローシーが出演したかどうかについては不明。
- ⁸ 帝劇専務の山本久三郎が後に述懐したところによると、ローシーは「マリイ・ネリイ」というエイジェンシーの紹介で招聘に至ったという。（山本他、1936、p.21）
- ⁹ *His Majesty's Theatre Program*、1911 年 4 月 17 日付。
- ¹⁰ アルハンブラ劇場のバレエ衣裳製作の多くは、Alias of 36 Soho Square という会社が担った。

参考文献

- 市川雅「世俗的バレエ—エムパイア劇場について—」『女子体育』19 号、pp.50-56、右文館、東京、1977
- 井野瀬久美恵『大英帝国はミュージック・ホールから』朝日選書 395、朝日新聞社、東京、1990
- 上野房子「日本初のバレエ教師 G.V.ローシー 来日前の歩みを探る」『舞踊学』第 14 号、pp.1-11、舞踊学会、茨城、1992
- 上野房子「G.V.ローシー 日本初のバレエ教師 離日後の歩み（1918～1938）」『舞踊学』第 16 号、pp.61-62、舞踊学会、東京、1994
- 上野房子「アートとショービジネスの間で—ダンス揺籃期ロサンゼルス—の G.V.ローシー—」『大正演劇研究』第 8 号、pp.88-103、明治大学大正演劇研究会、東京、2000
- 大笹吉雄『日本現代演劇史 明治・大正篇』白水社、東京、1985
- 大笹吉雄『日本現代演劇史 大正・昭和初期篇』白水社、東京、1986
- 大場建治『ロンドンの劇場』研究社出版、東京、1975
- 日下四郎「ロンドン、ウエスト・エンド時代の G・V・ローシー」『舞踊学』第 7 号、pp.43-44、舞踊学会、東京、1984
- 里見悦郎「英国クラシック・バレエ教育史研究—ビクトリア期英国バレエの萌芽期と 1920 年代バレエ教師組織化の動き—」『比較舞踊研究』10 巻 1 号、pp.34-47、比較舞踊学会、千葉、2004
- 鈴木晶『バレエ誕生』新書館、東京、2002
- 鈴木晶編『バレエとダンスの歴史：欧米劇場舞踊史』平凡社、東京、2012
- 曾田秀彦『私がカルメン』晶文社、東京、1989
- 星野高「＜エンパイア＞と帝国劇場」『劇・ドラマ』43 号、pp.6-9、劇場文化・ドラマの会、東京、2009
- 星野高「帝劇の時代」神山彰編『商業演劇の光芒』pp.51-80、森話社、東京、2014
- 増井敬二『日本のオペラ 明治から大正へ』民音音楽資料館、東京、1984
- 山本久三郎他「帝劇華やかなりし頃を語る」『舞踊藝術』8 月号、pp.17-22、舞踊藝術社、東京、1936

- Christout, Marie-Françoise, *Histoire du ballet*, Presses universitaires de France, Paris, 1966（佐藤俊子（訳）『バレエの歴史』白水社、東京、1970）
- Craine, Debra & Mackrell, Judith, *The Oxford Dictionary of Dance*, Oxford University Press, 2000（鈴木晶（監訳）『オックスフォード バレエ ダンス事典』平凡社、東京、2010）
- Reyna, Ferdinando, *Histoire du ballet*, Editions Aimery Somogy, Paris, 1964（小倉重夫（訳）『バレエの歴史』音楽之友社、東京、1974）
- Beaumont, Cyril W, *Complete book of ballets : a guide to the principal ballets of the nineteenth and twentieth centuries*, Putnam, London, 1956
- Carter, Alexandra, *Dance and dancers in the Victorian and Edwardian music hall ballet*, Ashgate, Hampshire, 2005
- Clarke, Mary & Vaughan, David, *The Encyclopedia of dance & ballet*, Pitman, London, 1977
- Guest, Ivor, “Russian Dancers in London Before Diaghileff”, *The Ballet Annual* No.14, pp.84-89, 1960.
- Guest, Ivor, *Ballet in Leicester Square*, Dance Books, London, 1992
- Guest, Ivor, *Romantic ballet in England*, Dance Books Ltd, London, 2014
- Haskell, Arnold L, *The national ballet : a history and a manifesto*, A. & C. Black, London, 1943
- Howard, Diana, *London theatres and music halls : 1850-1950*, the Library association, London, 1970
- Perugini, Mark Edward, *The Art of Ballet*, M. Secker, London, 1915
- Pritchard, Jane, Collaborative Creations for the Alhambra and the Empire, *Dance Chronicle*, Vol.24, No.1, pp.55-82, 2001
- Pritchard, Jane, Archives of the Dance(24):The Alhambra Moul Collection at the Victoria and Albert Museum, *Dance Research*, 32-2, pp.233-257, Edinburgh University Press, 2014

やまだ さやか／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

山田小夜歌さんは、日本バレエ草創期に来日した G.V.ローシー[Giovanni Vittorio Rosi, 1867-?] の日本における舞踊を中心とした活動に焦点を当て研究を継続している。日本バレエ史におけるローシーの位置づけを明らかにしようとするためには、来日前のロンドンでの彼の舞踊活動に関する史資料収集が必要不可欠である。従って、海外調査研究においてローシーが在籍した 1902 年から 1912 年までのアルハンブラ劇場、エンパイア劇場、ヒズ・マジェスティーズ劇場の公演プログラム、舞台写真、関係する新聞・雑誌記事といった史資料の収集と閲覧を行った。今回の調査では、昨年度予定しながら果たせなかったヴィクトリア&アルバート博物館の閲覧室に訪問し、貴重かつ膨大な一次史資料の閲覧及び収集をなし得たことは大きな成果である。それだけでなく、同館の学芸員より直接貴重な情報提供を受けられたことは大きな収穫であろう。本調査で得られた史資料を用いた研究内容は、博士論文の第 1 章と第 2 章に関わる重要な部分になるであろう。さらに、この研究を深化させることによって舞踊学への貢献を期待している。

（お茶の水女子大学基幹研究院 文化科学系・猪崎 弥生）

Research on the Activity of G. V. Rosi at Variety Theatre in London

Sayaka YAMADA

The purpose of this research was gathering information about the activities of Giovanni Vittorio Rosi [1867-?] during his years at variety theatres in London. I visited Victoria&Albert Museum Archives to check programs and playbills from two variety theatres, the Alhambra and the Empire, and His Majesty's Theatre. In addition, I checked very valuable materials, such as correspondence, cuttings books and photographs. I also visited the British Library and Westminster Reference Library to look through some periodicals and newspapers.

The findings obtained from this trip will allow to establish a clearer background of Rosi and his intentions behind his activities as a ballet master at the Teikoku Gekijyo in Japan.